OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ＜紹介＞加藤昌嘉著『『源氏物語』前後左右』 |
| Author(s) | 宮川, 真弥 |
| Citation | 語文. 2014, 103, p. 57-58 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/70945 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## 加藤昌嘉著『『源氏物語』前後左右』

宮川真弥

"First accumulate a mass of Facts: and then constructs a Theory." That, I believe, is the true Scientific Method.——Carroll, L. *Sylvie and Bruno*（ch.18）

本書は、本誌第九十八輯に紹介する加藤昌嘉著『揺れ動く『源氏物語』』（二〇一一年、勉誠出版）に次ぐ著書であるが、本書あとがきによるとはじめは「同時発売をもくろんだ」ものとの由である。まずは、以下に本書の構成を示そう。

はじめに

**第Ⅰ部　作り物語とは何か**　（計52頁）

作り物語のエレメント

ⅰ　作り物語のキャラクター／ⅱ　作り物語のストーリー／ⅲ　作り物語のカメラ／ⅳ　作り物語の形態と表記

作り物語と作り物語

ⅰ　連結と合流／ⅱ　組み換えつづける／ⅲ　時空を引き継いで

**第Ⅱ部　和歌は物語の肝である**　（計100頁）

琴で／笛で、和歌を詠む

ⅰ『浜松中納言物語』の場合／ⅱ『うつほ物語』の場合／ⅲ『狭衣物語』の場合／ⅳ『住吉物語』『風につれなき』『恋路ゆかしき大将』の場合／ⅴ『伏屋物語』の場合／ⅵ『落窪物語』『寝覚』の場合／ⅶ『一本菊』『毘沙門』の場合

和歌の書記法

ⅰ　和歌を、一〜二字分、上げる／下げる／ⅱ　和歌埋没——仮名日記・歌物語における——／ⅲ　和歌埋没——歌物語・作り物語における——

「とふにつらさ」の涙

ⅰ　作り物語の中の「とふにつらさ」／ⅱ「とふにつらさ」は「涙」「泣く」と連繋する／ⅲ　仮名日記・軍記物語・お伽草子の中の「とふにつらさ」／ⅳ　最古例は『源家長日記』／ⅴ　和歌の中の「とふにつらさ」／ⅵ「とふ」と「涙」／ⅶ「とはぬはつらき」

**第Ⅲ部　『源氏物語』の成立・作者・本文**　（計125頁）

〝『源氏物語』はどのように出来たのか？〟を再考する

ⅰ『源氏物語』成立論の流れ／ⅱ　紫上系・玉鬘系という二つのセリー／ⅲ『源氏物語』第二部にも玉鬘系は存在するか？／ⅳ　玉鬘系ブロックは後記挿入されたものか？

〝『源氏物語』の作者は紫式部だ〟と言えるか？
　ⅰ『紫式部日記』の中の『源氏物語』関連記事／ⅱ『紫式部日記』の中で「物語」としか書かれていない記事／ⅲ　西暦一〇〇〇年代の資料／ⅳ　西暦一一〇〇年代～一二〇〇年代の資料
本文研究と大島本に対する15の疑問
　ⅰ　定家本・明融本・大島本の関連性について／ⅱ　定家本『源氏物語』の複数性について／ⅲ　大島本を底本とする注釈書について／ⅳ　大島本「柏木」巻末の切除について／ⅴ《青表紙本》《河内本》《別本》という概念について
本文の傍らに／或いは 本文となって
　ⅰ　パラテクスト＝ペリテクスト＋エピテクスト／ⅱ　書き入れも注釈である／ⅲ　テクスト本体かペリテクストか？　作者の所為か享受者の所為か？／ⅳ　注釈は本文に容喙する
あとがき

　目次によって概要は端的かつ的確に把握できよう。第Ⅰ部では古来存在する〈作り物語〉というジャンルの定義と特質とを論じる。第Ⅱ部には和歌に関する論考が収められる。作り物語特有の、音楽によって和歌を詠む場面についての考察。和歌の書記法の検討と、それに伴う本文への埋没の指摘。「とふにつらさ」は一つのイディオムとして捉えるべきこと。第Ⅲ部は『源氏物語』の成立・作者についての問い直しと、本文研究の現状に対しての提言である。

　そこに貫徹するのは、開かれた議論・論証に対する強い志向である。一例を挙げれば、特に第Ⅲ部に顕著な、考え得る総ての可能性を列挙し、棄却の理由も示しながら進めてゆく考察の有り様はその現れであろう。

　論証は総て前提から発する。文学研究にとって、何よりも確かな、そして誰もが共有しうる前提は、そこに存在するモノとしての伝本（テクスト）だろう。加藤氏は作品本文を引用するごとに、煩を厭わず伝本を明示する。これはたとえば、大島本『源氏物語』ではなく、『大島本　源氏物語』なのだという主張に他なるまい。伝本名を除いた『源氏物語』は実在しないのであるから。

　我々は幸いにして古来の伝本を豊富に有している。それら一つ一つの伝本を虚心に読み返すべき段階にあること、またそのことによる研究の可能性を本書は明晰に示している。

（勉誠出版、二〇一四年五月、二九六頁、四，八〇〇円）

（みやがわ・しんや　本学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）